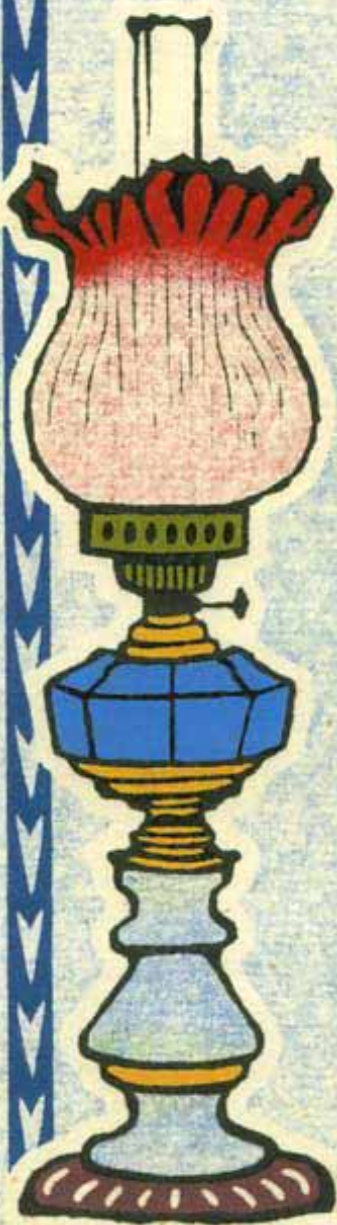


春燈

7 月號

July 2010



主宰の句

安立公彦

ゆく春や寝釈迦顔なる伊吹山

筑波嶺に雲なき朝の代田かな

ひとり湯に三筋の菖蒲愛しめり

天に星地に母の日の夕灯

ここみ見る庭石菖のほの揺れを



燈下集



○ 池園二三江

利久忌や利休饅頭うすみどり
童顔の円空仏や初ざくら
囀や家政婦口笛自在にて
み吉野の茶粥の渋し山ざくら
春昼の猫に移りし欠伸かな

○ 鈴木静恵

山国の遅春を回す水車かな
光陰や春を奏つる湯西川
春疾風落人村を震はせり
奥鬼怒の一会のさくら惜しみけり
雲水の鉄鉢に散るさくらかな

○ 菊地瑩子

横浜の海へ春愁を放しけり
つつがなく暮れて朧に満月で
落とし蓋に皮を二・三枚筍煮る
ハンカチの木にハンカチの花が咲き
幸不幸かはりがはりに夏は来ぬ

○ 加藤良子

写メールで届きし京の桜かな
櫻桃子偲ぶ岩村おきまつり
春の旅真白き富士を拝みぬ
白噴井の水を味はふ春意かな
蕉翁の草鮭の跡や落し文

○ 鈴木直充

俳諧に美濃派伊勢派や水草生ふ

蛭烏賊たんと食うべて光らむか

城のある町の日暮や藤の花

日月も吾も過客や春惜しむ

病むとなく健やかでなし牡丹散る

○ 高橋和女

花守の一途の恋の一樹かな

阿吽とはいかぬ一事や花ぐもり

薔薇剪つて残る惑ひを断ちにけり

真珠抱く貝の夢みる海朧

三叉路の信号長き薄暑かな

○ 上野昌子

僭称シューベルトの野薔薇こと難波薔薇

外洋ヨット各邸前のブイに係留（芦屋浜三句）

ヨットも屋敷も今は静かや客待ちて

鶴塚へ案内したもれ虎鷲

揚げ焼いてすます昼食傘雨の忌

○ 和田孝村

蒼天を押し上ぐ伊吹山夏近し

此やこの蛤塚や花は葉に

ことさらに故郷は遠し菜飯食ぶ

蕉翁の影追ひ春を惜しみけり

三成苦悶枝垂は紅を尽さざる

○ 中村喜美子

妃の名冠せし薔薇の香り立つ

薔薇の香の迎へてくれしひとりの家

美しき地球の狂ふ青葉冷

年ごとに母似となるや母の日来

良き笑顔の人と出合ひし聖五月

○ 乗鞍三彦

はつものに妻の摘みきし瘦せ蔵

佐用川の刑場あとの桜かな

花の散るいまさら急ぐ用はなし

花吹雪はなし途切れてしまひけり

片雲の雲なき空へ揚雲雀

○ 柴崎甲武信

松籟と和してそよぎぬ若楓

たんぼぼよりすみれぞ業平塚守るは

水草生ふ尺余の鯉の恋に群れ

蝌蚪群れて楽市楽座現じけり

川灯台点して雁の別れかな

○ 岩谷丁字

付悪き蛍光灯や梅雨の夜

母在さぬ夜の風鈴鳴りにけり

憂きことの多き余生や門火焚く

たかが田舎されど田舎や星月夜

まとひつく犬吠り居し大暑かな

○ 近藤牧男

隅田川さくらの帯を流しけり

通ひ路の旦暮のさくらぶぶぎかな

花の宿廊下の隅に傘干され

湧水に手を濡らしては春惜しむ

父をよく知る人來たり柏餅

○ 吉澤恵美子

桜鯛海の七色ほしいまま

師の句碑のしだれ桜やさざえ堂

倒れてもいちやう木魂の芽吹かな(鶴岡八幡宮)

春の潮「ひようたん島」は旅立てり(悼)

一角の茅花吹かるる売地かな

○ 卜部黎子

つばくらや醜咳く仕込み蔵

網焼の魚介燻らせ安房遅日

望郷や春の渚の貝拾ふ

今だからと言はるる話花筵

たんたんと過ぎゆく余生葱坊主

○ 卯木堯子

甘き香のベトナム珈排復活祭

春帽子試しては憂さ捨てにけり

中指もて暈す絵具や柳の芽

花散るや水面の木々の影に添ふ

みどりの日卵片手で割つてみる

当月集

安立 公彦選



○ 片山博介

みちのくへつづくこの道かぎろへる

たんぼぼや路通が筆の芭蕉塚（正覚寺）

田楽の八丁味噌も美濃国

花菜風桑名へと川下らばや

百代を湧きつく水や春の月

○ 矢口笑子

デイズニールランドの城の尖塔鳥雲に

春愁やアリスの落ちる穴の底

明け方の雨ひと揺すり山笑ふ

散る花の真つ只中や男坂

夏めくやスカイツリーは伸び盛り

○ 清水美子

行く春や寺歴を秘むる高野槇

風光る石の井桁の自噴水

春雷や寺門に掲ぐる禪語の偈

天主つらぬく通し柱や春の月

万緑や奈良墨で書く千字文

○ 小山繁子

表富士見ゆる街なり蓬摘む

江ノ電の警笛落花きりもなや

花惜しむ一事に執す文机

肩揉み機撰る母の日のプレゼント

茅花流し休耕田を余しけり

○ 永島雅子

ゆるゆると美濃路日和の春日傘

御茶壺道中往き来の美濃路夏隣

鯉跳ぬる大き水音夏近し

伊吹嶺をはるかに城下桶若葉

服薬の宮の噴井を汲みにけり

春燈の句

安立 公彦選



句碑にふれ我も旅人花水木

足もとにつつじ咲かせて芭蕉句碑

伊吹山心ばかりの雪残し

芽柳や飛びつきさうな鯉の群

おぼろ夜のふたみに合はぬ貝合せ

俱会一処桜蔭降る美渡路かな

伊吹嶺に片雲とどむ松の芯

蕉翁の句碑に影さす柳かな

春暁の海見る窓の息ぐもり

すぐ萎ゆる笹の山菜春夕

葉隠れの鳥声さがす夏隣

水さびのゆるる日差や蝌蚪の群

思ひあぐねて藤房揺るる奈良にあり

香を追へば土塀に白き茨の芽

アンニュイな薔薇にせんなき物思ひ

奈良町の永きひと日の鐘の音や

大阪 柿原よし子

香川 妹尾 貞雪

千葉 吉村さよ子

大阪 小田 明美

レガッタや親子に違ふ応援歌

レガッタの一艇かるき權の音

町の名を祭法被に残しけり

神田結び漢艶めく祭かな

春風や渡船の底の波の音

径なりに島をめぐるや春日傘

春の闇飛天のおはす堂の内

のどけしや受話器に聞こへ鳩時計

帆船にジャズの洩れあるイースター

街角のからくり時計夏兆す

母の日やゆたかな色の混ぜごはん

蛙鳴く闇ふかふかと人嫌ひ

台場跡石垣濡らす木の芽雨

楊貴妃ざくら鴨黙にして啄ばめり

騒音の消ゆるせせらぎ座禅草

暮出でて「歩こう会」の列横切る

東京 小俣 剛哉

千葉 西岡 啓子

神奈川 宮崎 紗伎

神奈川 持田 信子

余言

安立公彦

事の皆さんのご尽力に感謝します。

訪れた大垣は、市中を巡る「水門川」に二十八基の橋が架かり、その中央部に改修中の大垣城が、平城らしい姿を足場の間から覗かせていた。

大垣市は現在「奥の細道結びの地」をキャッチフレーズに町興しを図っている。町なかの何処に行っても、芭蕉と友人木因のゆかりは着いてくる。

大垣はまた良質な水に恵まれた地として、古くから水の都と称されて来た。立ち寄った八幡神社の「自噴水」は、井桁に組んだ湧水井戸枠から、清冽な水が豊かに湧き上っていた。落ちついた口当りのいい水だった。

作者の句、大会の際は中七の表現と下五の文字が違っていった。掲出句の推敲を経てみごとな立句となった。「水を豊かに」がこの地の風情をよく表わしている。

城のある町の日暮や藤の花

鈴木 直充

大垣は一度は訪れたい地だった。元禄二年三月二十七日(陽暦五月十六日)、四十六歳の芭蕉は、曾良を伴い、「前途千里のおもひ胸にふさがりて」、全行程一五六日、四七六里に及ぶ奥羽行脚の旅に出る。

「奥の細道」ほど多くの人に読まれている紀行文は他にはない。俳句に縁のある私たちにとっては、常に机辺に置くべき一書である。

芭蕉が大垣に着いたのは、諸説あるが八月二十一日(陽暦十月四日)と言われている。関西大会の日程とは季節は異なるが、ほそ道結びの地で俳句大会が出来ることは有難い。幹

大垣に着いたのは正午すこし前だった。ホテルのロビーで、鷹崎由未子、岩永はるみのお二人に会う。「私たち前の日から来ているので、案内しましょう」とうれしい言葉をかけて貰う。居合した永島雅子さんと四人で、水門川に沿って歩き出す。

ホテルを出てすぐの民家の垣に、一本の藤がやわらかな花房を幾つも見せていた。市中のどの藤もまた咲き初めたばかり

りというのに、この藤の風に揺れるゆたかな花房は、何とみごとな光景だろうか。それはほそ道結びの地としての当地にふさわしい印象を与えるものだった。

この句の「藤の花」には、旅人としてこの地に立つ作者の思いが感じられる。さらに、「城のある町の日暮や」が、この地の情景を余すところなく表わしている。それは大垣という芭蕉ゆかりの土地への挨拶であり、遡って三二二年前当地で旅を結んだ芭蕉への挨拶でもある。

水草生ふ尺余の鯉の恋に群れ

柴崎甲武信

水門川の流れは折しも水草を靡かせ、おそらく六十糶はあろうかと思う鯉を数多見せていた。清水橋という橋の手前で、一群の鯉が―それは十数匹は居ただろう―卍巴となり、水しぶきをあげている。鯉にも、求愛のシーズンというのはあるのだろうか。

清冽な流れと水草の上で、それらの鯉の乱舞は、作者が「恋に群れ」と把握した通りの姿だった。

手許に「サカナの雑学事典」という本がある。それによると、「鯉は世界で最も長命な魚」といわれ、「岐阜白川の地には、百五十歳以上の鯉が六尾も生存している（四十三年前の謂）」と書いてある。この信疑は別として、この句を見ると、一瞬そういう思いに駆られる。

みちのくへつづくこの道かぎろへる 片山 博介

ほそ道結びの地大垣から遡ると、その道はみちのくへ続く。みちのくは古代からうたびとの憧れの地だった。近代でも、石川啄木、宮沢賢治、太宰治など当地生れの作家には、どこか人を引きつける魅力がある。

作者は今、奥の細道結びの地に立ち、はるかに時空を超えた芭蕉の旅に思いを致している。現実の道には陽炎が立っているが、作者はその陽炎の先にはつきりとみちのくの道を捉えているのだ。ロマンを感じる句だ。

句碑にふれ我も旅人花水木

柿原よし子

大垣の街を流れる水門川に沿って、芭蕉ゆかりの句碑が二十数基立っていた。古池の句、蛤の句もある。

作者はそれらの句碑をめぐる、一つの句碑に手を触れた瞬間、私も旅人なのだと思った。その思いは感動となり、自ずと芭蕉の旅に及ぶ。こういう吟行の場で大事なことはその感動である。大垣の街は花水木の盛りだった。

おぼろ夜のふたみに合はぬ貝合せ

妹尾 貞雪

ほそ道結びの句が、〈蛤のふたみにわかれ行秋ぞ〉なのは良く知られている。芭蕉はそのあと伊勢に向うので、ふたみを二見が浦に懸けて言っているのも同じ。作者はそれを「貝合せ」にとり、「ふたみに合はぬ」としている。諧謔につながる表現である。